双角有孔土製品についての覚書

蜂　屋　孝　之

はじめに

千葉県内から出土する弥生時代後期から古墳時代前期にかけての時期に見られる土製品の一つに「双角有孔土製品」がある。『千葉県の歴史』において富津市打越遺跡から出土したこの土製品３点を取り上げたことがあるが、その後の出土例は増えていないようである（蜂屋 2004）。秦野昌明は2001年に、それまでの出土例20点を集成し検討を加えている（秦野 2001）。この集成のうち、出土のみが報じられていた市原市台遺跡の出土例について2017年に報告書が刊行され、その詳細が明らかとなった（市原市教育委員会 2017）。

本稿では、台遺跡の出土例の詳細を観察するとともに、秦野の集成以後の新資料も加えて、数少ないこの土製品の形態や時期などについて確認し、今後の新資料発見の一助としたい。

１　市原市台遺跡出土例

台遺跡から出土した双角有孔土製品は、報文ではカマドを伴う古墳時代中期末～後期初頭の123号竪穴住居跡からの出土とされている。この竪穴住居跡は、古墳の周溝や近世区画溝に壊されており、遺存しているのは３分の１程度である。石製模造品やその未成品など、竪穴住居跡の時期とは異なる遺物も多いことから、竪穴は全体的に攪乱を受けていると考えられる。双角有孔土製品も竪穴住居跡の時期とは異なると考えられる。

写真１が台遺跡から出土した双角有孔土製品である。ほぼ完形だが、片側の角部分と縁辺に僅かな欠損がある。全体形はＵ字形を呈し、外縁は突帯となっており、上部両端からＢ面側に向けて角状の大きな突起が付いている。Ａ面は凸面、Ｂ面は凹面を呈する。穿孔が５か所ある。Ａ面のほぼ中央に小さな穿孔が施され、その左右と上位に２個ずつ穿孔が施されている。左右の穿孔は、中央の穿孔よりも大きく、穿孔に使用した棒状工具が、大小２種類あったのかもしれない。穿孔方法は、Ａ面方向から棒状工具を差し込んでＢ面に突き通した後引き戻しており、Ｂ面には押し出された粘土がバリ状の高まりを見せている。また、穿孔の際の押し広げはほとんどない。Ａ面は比較的丁寧に調整が施されており、穿孔は調整後に行われている。Ｂ面の調整は雑で、表裏の調整の差は歴然としていることから、製作時からＡ面を主面とする意識があったこと、さらに穿孔具の挿入方向がＡ面からであることもそれを裏付けていると考えられる。大きさは縦の長さが3.9㎝、横幅が3.8㎝、角部を含む奥行きが3.2㎝である。色調はＡ面の下半が煤けた暗褐色を呈するほかは、褐色を呈する。

最後にこの土製品は、自立するような平らな面を伴わない。どのように置けばよいのか迷う安定感のない形態である。

２　双角有孔土製品とは

秦野昌明は、1988年に刊行された中里前原北遺跡の報告書において、双角有孔土製品について次のように定義し用途についても言及している（秦野 1988）。

「「双角有孔土製品」とは、上部が半円形に抉ったように整形が施され、その両端が角状をし、やや反り上がり、胴部には数点の小孔が穿たれている土製品である。整形及び文様などから、文様もしくは突起のある面が表面で、中央部が大きく凹む面が裏面と考えられる。その用途については、小孔に紐状のものをとおし吊り下げる、あるいは小孔に紐状のものをとおし左右に引っ張った状態で身に付けたことが考えられる。」

出土例については、埼玉県旧与野市中里前原北遺跡１例・中里前原遺跡１例、朝霞市泉水山遺跡１例、旧大宮市北袋遺跡１例、旧浦和市日向北遺跡２例の６例を一覧表に掲げている。このほかに千葉県市原市草刈遺跡、同市台遺跡から各１例、埼玉県富士見市や千葉県富津市からも出土例があるとことを報じており、全部で10例を越える出土例をこの時点で確認している。時期は、弥生時代後期中葉～後葉を中心とする前後の時期で、限られた地域のものと推測している。

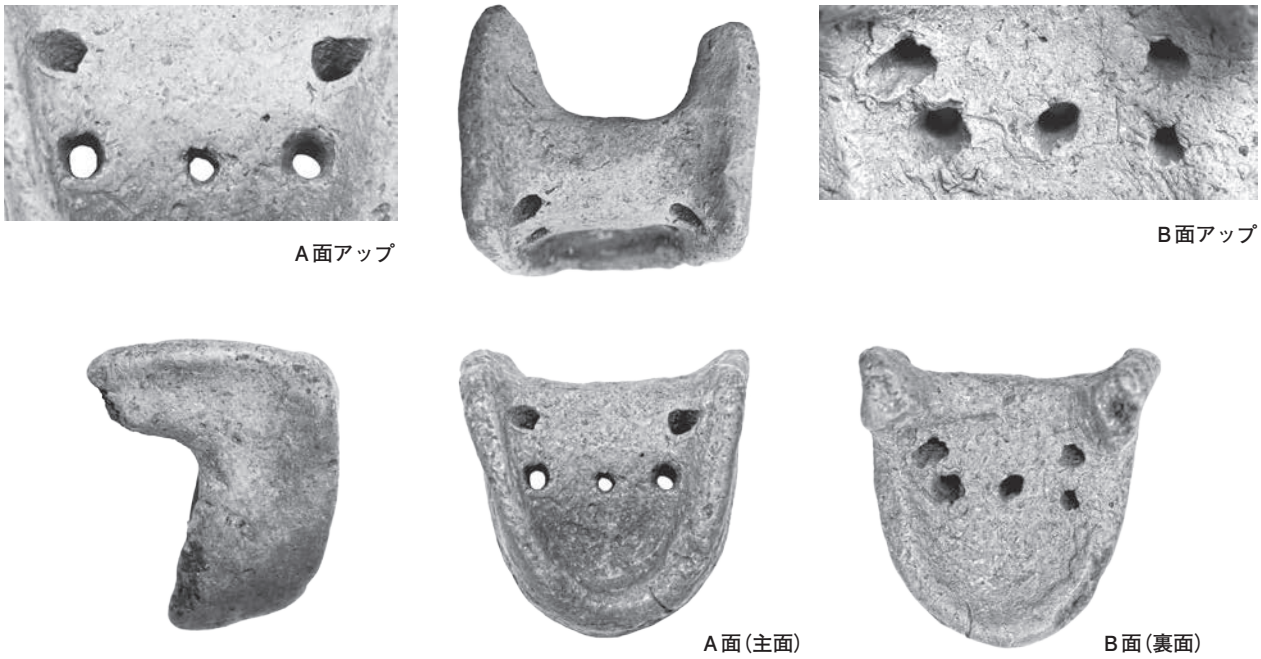


写真１　台遺跡出土の双角有孔土製品

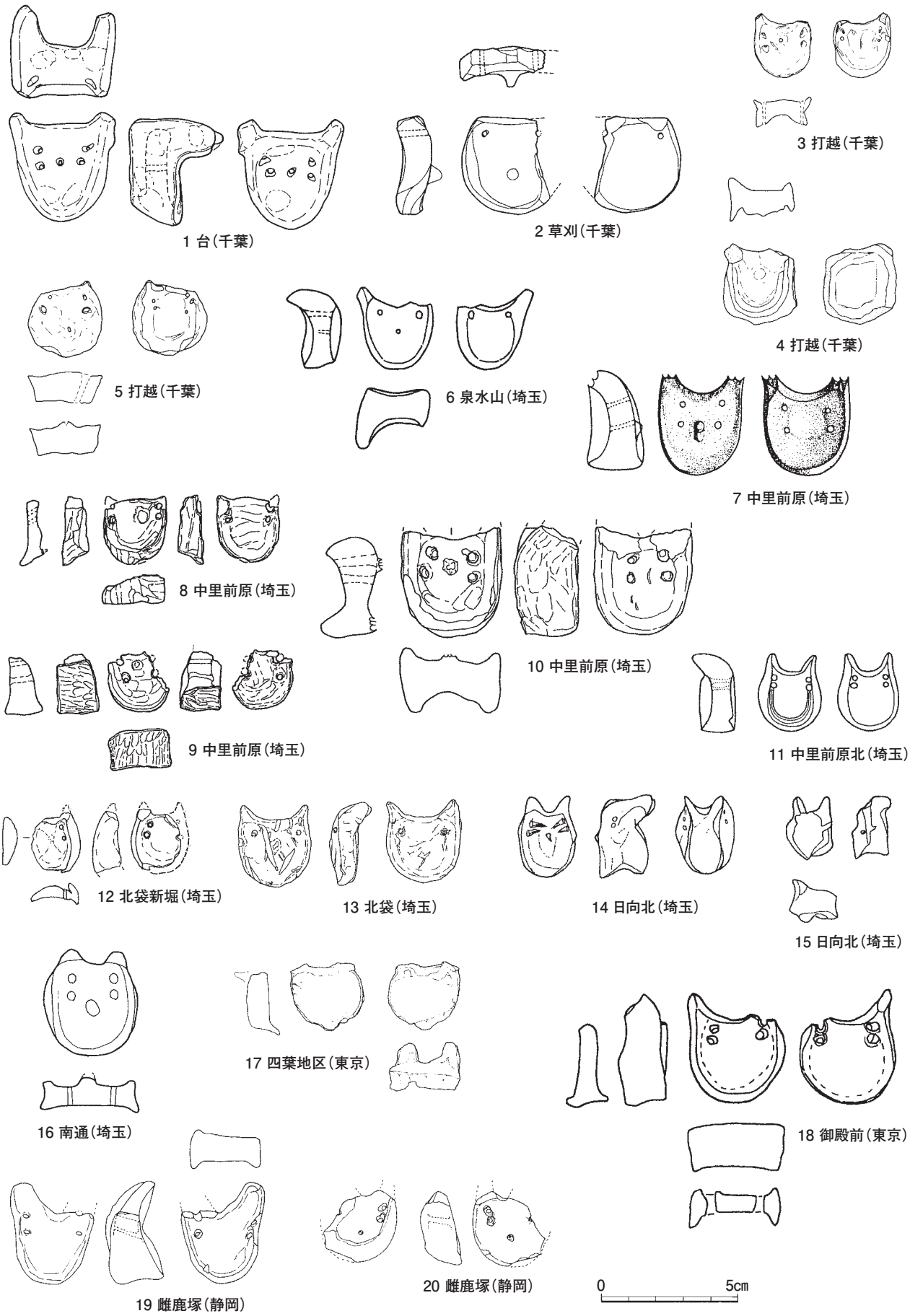
また、秦野は、2001年に双角有孔土製品を改めて集成し、分布とその役割について考察を加えている（秦野 1988）。集成されたのは、未報告の台遺跡例を含む20点で、埼玉県が11点と最も多く、千葉県が５点、東京都２点、静岡県２点となっている。新たな出土例を含め帰属する時期は、弥生時代後期から古墳時代初頭としている。秦野は、双角有孔土製品に表裏があり、突起などがある面を表面と考え、共通する特徴として、竪穴住居跡からの出土例が多いこと、集落内での出土率が極めて低いこと、環濠集落や拠点集落などで出土していることなどを挙げている。また、その形状から垂飾りであることは間違いなく、鹿を象徴した土製品の可能性について言及している。

３　双角有孔土製品の諸例

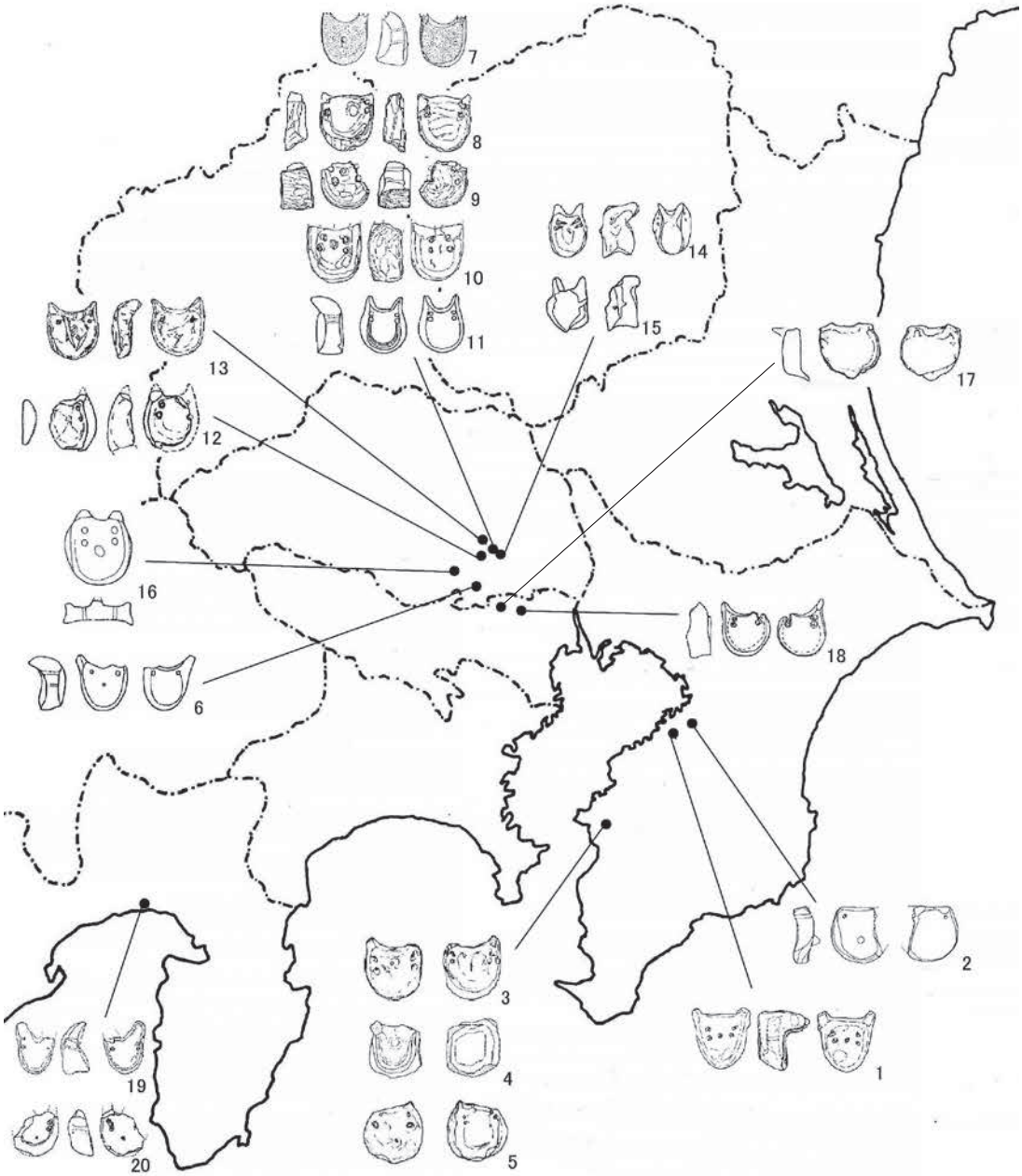
今回改めて、新たな出土例を探したが、管見にふれる限りではほとんど増えていない。秦野による集成以後では、さいたま市北袋新堀遺跡の１点のみで、加えた総数は21点であるが、さいたま市馬場北遺跡の出土例は実態が確認できないため、本稿で形態を図や写真で確認できるものは20点である。今のところ千葉県からの出土例は５点で、市原市台遺跡１点、市原市草刈遺跡１点、富津市打越遺跡３点である。最も多いのが埼玉県の12点で、そのほか東京都で２点、静岡県で２点となっている。

第１図２が草刈遺跡出土である。形態は膨らみのあるＵ字形を呈し、横から見ると反りがあり、裏面は中央が窪んでいる。主面中央からやや下方に小突起がある。上部両端に穿孔があり表裏の径がほとんど変わらない。外縁がわずかに突帯となっている。両端の角が僅かに突出するようだが、欠損している。双角有孔土製品が出土した竪穴状の遺構は、縄文時代中期の草刈貝塚が位置する台地の斜面にあって、主に縄文時代中期の土器が覆土に包含されていたが、炉跡もなく縄文時代の竪穴なのかは不明であることから、双角有孔土製品の帰属時期を確定することは難しい。

３～５が富津市打越遺跡から出土したものである。３は小突起が主面中央やや上に位置し、突起の中央にわずかな刺突が施されているようである。左右にそれぞれ２つの小孔が穿たれている。焼成前の穿孔と見られ、細い棒による刺突による穿孔である。外縁につまみあげたような突帯が巡る。裏面の中央が強く窪んでいる。角状の突起は左右とも若干欠損している。４は３例中最も大きなものだが、縁辺が欠けている。主面中央に小突起が伴っている。僅かな高まりであり粘土をつまみ上げた程度のものである。外縁はＵ字形の突帯となり、上端には欠損しているが２つの角状の突起が伴っていたと思われる。裏面は中央が窪み、その反対に主面が張り出た感じになっている。穿孔はない。５はやや厚みがある。主面やや下方に小突起が位置し、３と同じく僅かにつまみ上げ程度のものである。上部左右にそれぞれ２つの穿孔がある。主面側の径は



第1図　双角有孔土製品集成図



第２図　双角有孔土製品の分布

上段の孔よりも下段の方がやや大きい。３と同様に穿孔は主面から裏面に向かって開けられていると考えられ、裏面にはかろうじて穿孔が到達している。主面中央の突起には３と同様にわずかな刺突が施されている。両角は欠損しているが、若干のつまみ上げによる小さなものと思われる。

打越遺跡は、弥生時代後期初頭から古墳時代前期後半にかけての大規模集落跡で第１次調査だけでも319軒の竪穴住居跡が検出されている。３～５の双角有孔土製品は、それぞれ竪穴住居跡から出土している。３・５が古墳時代前期前半、４が弥生時代後期の竪穴住居跡からの出土であることが報告されている。３は弥生時代後期の竪穴を古墳時代前期の竪穴が壊しているものの、調査では弥生時代の竪穴から着手し、後から古墳時代の竪穴との切り合い関係が判明していることから、３は弥生時代の竪穴に伴う可能性がある。また、５は報文では「覆土の下層に、弥生時代的なものが残り、上層には古墳時代の遺物が含まれるという、過渡的な様相を示している」ことから、５は弥生時代後期末の可能性もある。このことから、千葉県内出土例に限れば、概略、弥生時代後期から古墳時代前期前葉の時期と判断されるが、可能性としては、僅か５点では

あるが、弥生時代後期に限定される可能性も残されている。

千葉県内では５点と数が少ないにもかかわらず、突起や穿孔などは一様ではなく、バリエーションがある。また、縦方向の長さでは、１の台遺跡例が最も大きく３が最小で約２倍の大きさの違いがあり、個体差がある。

他県の個体を俯瞰してみてみると、千葉県内出土例と同じようなバリエーションがある。20点の中で主面中央の表現は、小突起となるものが12点（60％）で最も多く、刺突乃至は穿孔によるものが３点、表現がないものが４点ある。また、左右の穿孔の有無については、左右２個ずつ、計４個の穿孔があるものが14点（70％）と最も多く、左右１個、計２個の穿孔が３点、穿孔が無いものが２点となっている。このことから、双角有孔土製品には、主面中央に小突起があり、左右に４つの穿孔が伴う例が標準的なスタイルと言えよう。７～10の中里前原遺跡の出土例に、大きさの違いはあるものの、穿孔などの配置には一遺跡としての統一性がある。

秦野はこの穿孔に紐を通して吊り下げたり身につけたりしたのではないかと推測しているが、台遺跡例などを見る限り、穿孔によって裏面のバリ状に残った粘土が剥落した形跡が見られないことから、吊り下げて常用されていたとは思われない。

秦野は「双角有孔土製品が「鹿」のエネルギーを秘めた「護符」的役割を果たしたものと推測しており、主面から裏面に向かい反り返っている２つの突起が、鹿の角を思わせるのも肯けるような気がする。個体により突出の度合いは多様であるが、打越遺跡のように僅かな突出ではあるが省略されずに表現されていることから、この土製品にとっては不可欠の要素なのだろう。

双角有孔土製品のさらなる特徴は、縁辺のＵ字状の突帯である。突出の度合いは強いものが多く表裏面ともにこの突帯によって窪んだ感じがさらに強調されている。いったい何を表現したものなのだろう。

双角有孔土製品は、竪穴住居跡から出土しているものが多い。埼玉県内の諸例のほとんどが弥生時代後期の竪穴住居跡から出土している。土壙墓などからの出土例がないことから、個人に対して副葬される遺物でないことは間違いなく、土器などと同様にその役割を終えて廃棄されてしまうものと考えられる。

おわりに

最後に改めていくつかの点について、確認してみたい。台遺跡出土例で見てきたように、双角有孔土製品には主面と裏面があり、製作時から調整の仕方に精粗の違いがある。また、穿孔の方向が主面からであることからも表裏の認識が製作時からあったことを窺わせている。他県の例もほぼそれを肯定するものであろう。主面中央には僅かな高まりとなる突起が付けられるものが主で、刺突や穿孔の表現が少ないことから、刺突や穿孔は突起の省略形と考えられる。主面の左右に施される穿孔は４穴が主で、２穴のほか穿孔がないものも僅かにある。二つの角については、いずれの出土例も裏面側に突出したり、反り返っていたりしており、主面から見ただけではその存在や形状は、わかりにくく、主面から見た形状を重視したものではなく、その祖型に対する形態的な共通認識があったことによる造形なのだろう。双角有孔土製品の帰属時期は、弥生時代後期を主体とする。古墳時代前期前葉まで残る可能性もあるが、古墳時代前期の竪穴住居跡から出土したとされているものには帰属時期が疑われる事例が目立つ。今のところ弥生時代後期～古墳時代前期初頭の期間に限定される可能性が高いのではないかと推測される。出土した遺構には竪穴住居跡から出土しているものが主体で、土壙墓などからの出土例がなく、土器などと同様にその使命を果たすと廃棄されているようである。出土遺跡は、弥生時代後期の大規模集落にほぼ限られている点も興味深い。今のところその分布域は、埼玉県の大宮台地を北限として東京、千葉、静岡の南関東各県に限られている。

双角有孔土製品が現れる弥生時代後期の東海・関東は如何なる状況なのだろうか。大村直によれば、弥生時代中期末から後期初頭には大きな断絶があり、南関東の集落は、久ヶ原式の段階に東京湾沿岸地域にまとまり、後期中頃には相模湾の沿岸から埼玉県の大宮台地に至る地域に、愛知県の東部から静岡県辺りから大規模な波状的な集団移住があって、その集団移住に誘発され多数の環濠が掘削されるという。また、後期の相模平野から大宮台地の地域は、ハケ整形の台付甕を使用する東海地方と一体的な土器型式に書き換えられていくという（大村 2015）。双角有孔土製品の分布が大宮台地辺りまでに限られているのもハケ整形の台付甕の分布域と重なっている点で興味深い。房総半島東京湾沿岸地域は、この時期閉鎖的な土器型式圏を形成しているものの、東海地域からの文化的なインパク

トの影響を受けていることは間違いなく、小銅鐸などの出現もその一つの現れであろう。このような弥生時代後期の動静の中で双角有孔土製品が現れていることから、東海地方からの文化要素の流入が発生の契機となっている可能性が高い。秦野昌明もその論考の中で特徴的な分布状況から東海系土器の東への移動と人的交流による可能性を指摘している（秦野 2001）。

具象的な土製品がほとんどない弥生時代、いったい、双角有孔土製品は何を表しているのだろう。その由来を東海地方に求めるとしても、祖型となる土製品などは今のところ見当たらない。また、関東南部の弥生時代中期に祖型らしきものがあるかと言えば、それもまた見当たらない。小さな土製品ではあるが、謎は多く興味は尽きない。今後の出土例の増加に期待したい。

本稿を草するにあたり、下記の方々に実見や遺物の撮影、文献の収集についてお世話になりました。記して感謝申し上げます。

櫻井敦史、小橋健二、齋木誠、三田光明、市原市埋蔵文化財調査センター。

引用・参考文献

市原市教育委員会　2017『市原市台遺跡Ｅ地点』
蜂屋孝之　2004「弥生時代の特殊遺物」『千葉県の歴史　資料編　考古４』
秦野昌明　1988「第４章調査の成果と問題点」『中里前原北遺跡　上太寺遺跡』与野市教育委員会
秦野昌明　2001「双角有孔土製品の分布とその役割の一考察」『埼玉考古』第36号　埼玉考古学会
大村　直　2015「邪馬台国時代の房総」『邪馬台国時代の関東』青垣出版

出土一覧表文献

①市原市教育委員会　2017『市原市台遺跡Ｅ地点』
②(財)市原市文化財センター　1985『草刈遺跡』
③(財)君津郡市文化財センター　1992『打越遺跡・神明山遺跡』
④肥沼正和　1979「朝霞市泉水山遺跡（第Ⅳ地点）の調査」『第12回遺跡発掘調査報告会発表要旨』
⑤与野市中里前原遺跡調査会　1980『中里前原遺跡－第一次発掘調査報告書－』
⑥(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1999『中里前原遺跡　県営与野中里団地関係埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』
⑦与野市教育委員会　1988『中里前原北遺跡　上太寺遺跡』
⑧さいたま市遺跡調査会　2015『北袋新堀遺跡（第２次）』
⑨大宮市遺跡調査会　1987『北袋遺跡』
⑩浦和市遺跡調査会　1988『日向北遺跡発掘調査報告書（第２次）』
⑪富士見市遺跡調査会　1983『針ヶ谷遺跡群－南通遺跡第３地点の調査－』
⑫板橋区四葉地区遺跡発掘調査会　1988『四葉地区遺跡　昭和62年度』
⑬東京都北区教育委員会　2000『御殿前遺跡Ⅵ』
⑭沼津市教育委員会　1990『雌鹿塚遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
⑮秦野2001による。詳細不明

第１表　双角有孔土製品一覧

挿図番号	遺跡名	所在地	遺構名	時期	中心部の表現	貫通孔	全長(cm)	幅(cm)	文　献
1	台遺跡	千葉県市原市	(123号住居跡)	(古墳後期)	貫通孔	4	3.9	3.8	①
2	草刈遺跡	千葉県市原市	3号住居跡	不明	突起	2	3.6	3.2	②
3	打越遺跡	千葉県富津市	190号住居跡	弥生末～古墳前期前半?	刺突を伴う突起	4	2.5	2.7	③
4			178号住居跡	古墳前期前半？	突起	0	2.0	2.1	
5			31号住居跡	弥生後期後半	刺突を伴う突起	4	2.8	2.3	
6	泉水山遺跡	埼玉県朝霞市	住居跡	?	刺突文	2	2.6	2.3	④
7	中里前原遺跡	埼玉県さいたま市	包含層	－	突起	4	3.7	3.2	⑤
8	中里前原遺跡	埼玉県さいたま市	21号住居跡	弥生後期後半	突起	4	2.5	2.3	⑥
9			5号住居跡	弥生後期前半	突起	4	2.2	2.3	
10			20号住居跡	弥生後期後半	突起	4	4.0	3.6	
11	中里前原北遺跡	埼玉県さいたま市	3号住居跡	弥生後期後半	無	4	2.8	2.3	⑦
12	北袋新堀遺跡	埼玉県さいたま市	12号住居跡	弥生後期後半	突起？	4	2.3	1.8	⑧
13	北袋遺跡	埼玉県さいたま市	Y-26号住居跡	弥生後期後半	突起	2	3.0	2.6	⑨
14	日向北遺跡	埼玉県さいたま市	3号住居跡	弥生後期後半	突起	4	3.2	2.1	⑩
15			7号住居跡	弥生後期後半	不明	0	1.8	1.5	
16	南通遺跡	埼玉県富士見市	103号住居跡	弥生後期後半	突起	4	3.6	3.4	⑪
17	四葉地区遺跡	東京都板橋区	53号住居跡	弥生後期後半	無	0	2.4	2.6	⑫
18	御殿前遺跡	東京都北区	住居跡	?	無	4	4.0	3.5	⑬
19	雌鹿塚遺跡	静岡県沼津市	包含層	－	無	4	3.7	2.8	⑭
20			包含層	－	貫通孔	4?	2.7	2.6	
21	馬場北遺跡	埼玉県さいたま市	住居跡	?	－	－	－	－	⑮